

之のつく四字熟語一覧（準Ⅰ級）

□ いきんの栄	（いきんのえい）	衣錦之栄	成功、出世した後には錦（にしき）の着物を着て故郷に帰ること。「錦」は金や銀などの糸で織り込んだ美しい絹織物のこと。
□ いちじつの長	（いちじつのちょう）	一日之長	年齢が一日分年上なこと。または、少しだけ経験が多いという意味から、知識や技量などが少しだけすぐれていること。
□ いっかつの利	（いっかつのり）	一割之利	凡人でも、たまには役に立つこと。鉛でできた切れ味の悪い刀でも、一度はものを断ち切ることができることから。
□ いっすいの夢	（いっすいのゆめ）	一炊之夢	人の世界での繁栄は儚いということのたとえ。または、人の人生が儚いことのたとえ。「一炊」は一度飯を炊くこと。唐の盧生という人が、旅の途中の邯鄲の町で、道士から出世が叶うという枕を借りて寝ると、出世して財力や権力を手に入れる夢を見た。目が覚めると、宿の主人に頼んでいた、栗のかゆが出来上がっていないほどのわずかな時間しか過ぎていなかったという故事から。
□ いっせいの雄	（いっせいのゆう）	一世之雄	その時代で一番すぐれた英雄。「一世」はその時代、当時という意味。
□ いっちょうの患	（いっちょうのうれい）	一朝之患	少しの間、心配すること。または、急に心配になること。「一朝」はひと朝ということから、わずかな時間のたとえ。または、ある朝ということから、突然という意味。
□ いっぱんの恩	（いっばんのおん）	一飯之恩	ほんのわずかな恩義のこと。一度食事をご馳走になっただけの少しだけの恩義という意味で、そのような少しの恩義でも忘れてはいけないという戒めの言葉。
□ いつやの覧	（いつやのらん）	乙夜之覧	天子が読書すること。書物を読むことの大切さをいう言葉。「乙夜」は午後十時くらいの時間。「覧」は読書のこと。天子はとても忙しいため、夜遅くになってやっと読書する時間ができるとい意味から。「乙覧」と略して使うこともある言葉。
□ いばくの信	（いばくのしん）	移木之信	約束を必ず実行することのたとえ。為政者は人民に法の権威や信用を示すべきという戒めのこと。戦国時代、秦の商鞅が国民からの信用を得るために、南門の大門を北門に移した者に十金を与えると布告したが、皆疑い誰も移さなかった。五十金に増額すると移す者が現れたので、五十金を渡して約束を本当に守ると示した故事から。
□ うごうの衆	（うごうのしゅう）	烏合之衆	からすの群れは無秩序でただ集まっているだけということから、規律も統制も何も無く寄せ集めの集団や軍隊のたとえ。
□ うんかの交	（うんかのまじわり）	雲霞之交	一般的な関係を超越した交友関係のこと。雲と霞がたなびいている場所という意味から、仙人などの俗世を超越したものが住むとされている場所のこと。俗世を超越したものの同士の交友関係という意味から。
□ えいせつのオ	（えいせつのさい）	詠雪之オ	文才がある女性のこと。晋の王凝之の妻の謝道韞が、降る雪を白い綿毛がある種子の柳絮にたとえた詩を詠み、文才をたたえられた故事から。
□ えんおうの契	（えんおうのちぎり）	鴛鴦之契	夫婦の絆が非常に堅いこと。または、いつまでも夫婦として仲良く暮らすという夫婦の約束のこと。「鴛鴦」は雄と雌のおしどりのことで、雌雄が常と一緒にいる鳥ということから、夫婦の仲がよいことのたとえ。
□ おうそうの功	（おうそうのこう）	横草之功	とても簡単なこと、または少しの功績や功劳のたとえ。「横草」は草を踏んで横に倒すという意味。
□ おくうの愛	（おくうのあい）	屋烏之愛	溺愛、盲愛のたとえ。「屋烏」は屋根にとまっている烏（からす）のこと。その人を愛するあまり、その人に関わるもの全て、その人の家の屋根にとまっている烏さえも愛おしくなること。
□ かいけいの恥	（かいけいのはじ）	会稽之恥	戦いに敗れ受けた恥辱。または、人から受けた忘れることが出来ない屈辱。「会稽」は中国の山の名前で、春秋時代の呉と越の戦場跡。
□ かいてんのか	（かいてんのちから）	廻天之力	世の中の情勢が全て変わるほどの大きな力のこと。または、不利な情勢を一気に有利に変えることの出来る大きな力のこと。「廻天」は天を回すという意味から、世の中の情勢が変わること。「回天之力」とも書く。
□ かいりの士	（かいりのし）	魁壘之士	立派な体格をした人のこと。「魁壘」は他よりすぐれてたくましいこと。
□ かかんの言	（かかんのげん）	河漢之言	特に意味のない話。または、現実離れしているほら話のこと。「河漢」は天の川のこと。天の川の多くのように、次々と限りなく言葉が続くという意味から。
□ かがくの功	（かがくのこう）	下学之功	始めに簡単に身近にあることを学び、少しずつ難しいことを学んでいくこと。または、簡単なことから初めて、次第に上手くなっていくこと。「下学」はごく普通にある簡単なことを学ぶこと。「下学して上達す」とも読む。
□ かくめの士	（かくめいのし）	鶴鳴之士	才能や能力があっても、世のために使われることなく、世間から認められていない賢者のこと。または、公職についていない賢者のこと。「鶴鳴」は鶴の鳴き声のこと。山奥に隔絶している賢者をたとえた言葉で、山の中から鶴の美しい鳴き声は聞こえるが、姿を見ることは出来ないという意味から。
□ かくよくの罍	（かくよくのかこみ）	鶴翼之罍	軍隊の陣形の一つで、左右に長く広がった陣形のこと。鶴が翼を広げたような形に見えるということから。
□ かしの璧	（かしのへき）	和氏之璧	世に二つとない、極めて珍しい宝物のこと。「和氏」は楚の卞和という人物のこと。「璧」は宝玉のこと。卞和が山中で宝玉の原石を見つけ、レイ王に献上したが、ただの石だと言われ罰として左足を切られた。のちに武王に献上したが、同じくただの石だと言われ罰として右足を切られた。のちに、卞和の話を聞いた文王がその原石を磨かせたところ、正真正銘の宝玉であったという故事から。
□ かしよくの典	（かしよくのでん）	華燭之典	結婚式のこと。「華燭」はきらびやかで美しい灯りということから、結婚式の灯りのこと。「典」は儀式のこと。
□ かていの訓	（かていのおしえ）	過庭之訓	家庭での教育のこと。父親からの教えという意味から。「過庭」は庭を横切ること。孔子は、自分の息子の鯉が庭を横切るときに呼び止めて、詩や礼を学ぶことの大切さを諭し、鯉もそれによく従ったという故事から。「庭訓」と略すこともあり、「過庭之教」とも書く。
□ 烏のしゆう	（からすのしゅう）	烏之雌雄	是非や善悪が区別しにくく、判断しにくいこと。烏は雄も雌も色が黒くて判別しにくいという意味から。
□ かりょうの吟	（かりょうのぎん）	河梁之吟	親しい友人を見送るときの離れたくないという気持ち。「河梁」は川を渡るための橋。中国の漢の時代、異民族の匈奴に捕まった李陵が、一緒に捕まっていた蘇武が国に戻る時に送った詩から。
□ かんばの労	（かんばのろう）	汗馬之労	物事を成功させるために、苦勞しながらあちこち駆け回ること。「汗馬」は馬に汗をかかせるということから、戦場で功績を得るために駆け巡るということ。
□ がいせいのオ	（がいせいのさい）	蓋世之オ	やる気に満ちていて、世を覆い尽くすほどの優れた才能を持っている人のこと。「蓋世」は世を覆い尽くすこと。「オ」は優れた才能のこと。

☐	がろうの口	(がろうのくち)	餓狼之口	強欲で残忍な性質の人のたとえ。または、この上なく危険な状況。ひどく腹を空かせた狼の口の中という意味から。
☐	がんちゅうの釘	(がんちゅうのくぎ)	眼中之釘	自分に害を与えるもののたとえ。または、邪魔になる人や物のたとえ。中国の五大時代の趙在礼の悪政に苦しんだ人々は、趙在礼が転任することになり、目の中の釘が抜けたようだと喜んだという故事から。「眼中之丁」とも書く。
☐	きかいの心	(きかいのこころ)	機械之心	「機械」は巧妙な仕組みの器具のことから、たくらみや偽り、たくらみ偽る心のこと。または、策略をめぐるす考え。
☐	きこの勢	(きこのいきおい)	騎虎之勢	一度勢いがついでしまうと、途中でやめることが出来ないということ。「騎虎」は虎に乗ること。虎に乗った者は、降りると虎に食べられてしまうので、乗り続けるしかないという意味から。
☐	きざんの志	(きざんのこころざし)	箕山之志	世間での名声と利益を捨て、世間との接触を避けて信念を守ろうとすること。伝説上の人物の許由と巢父が、世間での名声を嫌い、信念を守るために箕山という名前の山でひっそりと生活したという故事から。
☐	きじょうの論	(きじょうのろん)	机上之論	理論的ではあるが、実際に行うことが不可能な考えや意見のこと。「机上」は机の上。「論」は根拠がひとつもない理論のこと。状況や状態などを一切考慮せずに、机の上で理論だけを考えたために、実現することが出来ない計画や議論という意味から。
☐	きせいの雄	(きせいのゆう)	希世之雄	この世のものとは思えないほどすぐれた英雄。「希世」はとても珍しいこと。「稀世之雄」とも書く。
☐	きっちゅうの楽	(きっちゅうのたのしみ)	橘中之楽	将棋や囲碁をする楽しみのこと。「橘」はみかんのこと。中国の巴キョウの人が大きなみかんの実を割ると、中に二人の老人がいて、囲碁を打って楽しんでいたという故事から。
☐	きゅうざんの功	(きゅうざんのこう)	丘山之功	無数の努力を積み重ねて成し遂げた、非常に偉大な功績。丘や山のように大きな功績という意味から。小さな石や土を数多く積み重ねて出来た丘や山ということから、数多くの努力を積み重ねることをいう。
☐	きよくこうの楽	(きよくこうのたのしみ)	曲肱之楽	富を求めず、貧しくても正しい行いをする楽しみのこと。または、貧しい暮らしをしていても、その中に楽しみはあるということ。「曲肱」は枕が買えないために腕を曲げて、肘を枕にするという意味。
☐	きんそうの寵	(きんそうのちょう)	巾箱之寵	肌身離さず持っておく、非常に大切なもののこと。「巾箱」はいつも近くに置いておく、布張りの書物などをいれる小箱のこと。「寵」は気に入るや可愛がるということ。
☐	ぎょふの利	(ぎょふのり)	漁夫之利	二者が争っている間に、無関係な者が苦勞することなく利益を得ること。「漁夫」は漁師のこと。古代中国の趙が燕を攻めようとしたときに、燕の遊説家の蘇代が趙の恵文王の元に出向いて「鰭(シギ)と蚌(ハマグリ)が争っている間にどちらも漁師に捕まえられてしまった」というたとえ話をした後に「趙と燕が争えば、弱ったところを秦に狙われて両国とも取られてしまうだろう」と言って恵文王を説得したという故事から。「漁父之利」とも書く。
☐	くくの心	(くくのこころ)	区区之心	「区」は小さな区画という意味で、「区区」は小さくて取るにたらないということから、取るにたらない小さな心のこと。自分の考えや心のことを謙遜するという言葉。
☐	くにくの計	(くにくのはかりごと)	苦肉之計	苦し紛れの策略のこと。または、自らの体を苦しめることまでして、敵を欺く策略のこと。三国時代、赤壁の戦いで呉の黄蓋が魏のスパイの前で、自らの意思で刑を受け、見限っての投降と思わせて、敵の陣営の船団に火を放ち形勢逆転した故事から。「苦肉之謀」とも書く。
☐	くばの心	(くばのこころ)	狗馬之心	地位が上の者への忠誠心、誠意のこと。「狗馬」は犬と馬のことで、犬や馬のように恩を忘れず主人に仕えて、少しずつでも恩返しをするという意味。君主に対する自分の忠誠を自らを卑下するという言葉。
☐	くんそくの悪	(くんそくのあく)	君側之悪	君主のそばに仕えている悪人のこと。または、君主に媚を売り、悪いことを企んでいる人のこと。「君側」は君主に近いところ、側近。「悪」は悪人。
☐	けいきの士	(けいきのし)	傾危之士	言葉や策謀で、国を混乱させ傾けて危くする危険人物のこと。「傾危」は傾いて危ない様子。
☐	けいざんの玉	(けいざんのぎよく)	荊山之玉	秀才で聡明な人のこと。「荊山」は卞和が宝玉の原石を手に入れたという中国の山の名前で、その宝玉のように価値のある人物という意味から。
☐	けいせつの功	(けいせつのこう)	蛰雪之功	苦しい環境の中で勉学に励むこと。「蛰雪」は蛰の光と雪明りのこと。中国の人物、車胤は貧しくて灯火の油を買うことができず、蛰を集めてその光で勉強していた。同じく貧しかった孫康は、雪明かりで勉強していたという二つの故事から。
☐	けいめいの助	(けいめいのたすけ)	鷄鳴之助	妻が夫を影ながら支えること。鷄の鳴き声が聞こえて、夫が遅刻してはいけないと思って起こそうとしたが、実は聞き間違いで、まだ夜中だったという故事から。
☐	けつじょうの政	(けつじょうのまつりごと)	結繩之政	古代に行われた政治のこと。文字が存在しなかった時代の政治を行う上での意志の伝達や記録の方法で、大事には大きな縄の結び目を結び、小事には小さな縄の結び目を結んだということから。
☐	けんがの弁	(けんがのべん)	懸河之弁	つまることなく、流れるような弁舌のこと。「懸河」は傾斜が激しい流れの速い川。止まることがなく、勢いよく流れる川のような弁舌という意味から。
☐	けんばの齒	(けんばのよわい)	犬馬之齒	自分の年齢を謙遜するという言葉。「齒」は年齢のこと。動物の犬や馬のように、大きな功績を残すこともなく、無駄に歳をとったということから。
☐	けんばの勞	(けんばのろう)	犬馬之勞	君主や他人のために出来る限りのことをすること。自分の労力を謙遜するという言葉で、犬や馬程度の働きという意味から。中国の三国時代、諸葛亮が劉備に出仕を承諾した故事から。
☐	げきじょうの歌	(げきじょうのうた)	擊壤之歌	古代中国の伝説の聖天子である堯帝が国を治めている時代に、世の中が平和であることを喜び、人々が歌った歌のこと。「擊壤」は足で地面を踏み、音を鳴らして拍子をとること。
☐	こうこくの志	(こうこくのこころざし)	鴻鵠之志	非常に大きな目標。大志。「鴻」はおおとり、「鵠」はくぐいのごとで、白鳥の古名。どちらも大きな鳥のごとで、英雄や豪傑などの偉大な人物のたとえ。中国の秦の時代、日雇い労働をしていた陳勝が「互いに金持ちになっても忘れずにいよう」と仲間と言い、それを聞いた雇い主が「日雇いの分際で何を言っているんだ」と嘲笑した。陳勝は「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」と嘆き、後に秦に反乱を起こして王になったという故事から。「燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや」を略した言葉。
☐	こうこの憂	(こうこのうれい)	後顧之憂	物事が終わったあとに残っている心配事。後日のことを心配すること。「後顧」は後ろを振り返るという意味から、あとに残る思いという意味。「後顧之思」とも書く。
☐	こうじの岳学	(こうじのがく)	口耳之学	底の浅い学問や知識のこと。聞いたことの意味をよく考えることもせず、そのまま人に伝えるだけの浅い学問という意味から。
☐	こうぜんの気	(こうぜんのき)	浩然之气	ゆったりとした壮大な気持ち。天地に恥じることのない道義にかなった行動をすることで、心に自然と生まれてくる強い精神のこと。「浩然」は広くて大きいこと。
☐	こうもんの会	(こうもんのかい)	鴻門之会	古代中国の漢の劉邦と楚の項羽が鴻門で会談したこと。この会談で項羽は劉邦を殺そうとしたが、劉邦の家臣が見破って劉邦は逃げ延びた。その後、項羽は劉邦に敗北して自決したという故事から。

□	ここのの臣	(ここののしん)	股肱之臣	君主の信頼できる家臣。または、そのような部下のこと。「股」は足のもも。「肱」は腕のひじ。どちらも人が動くために大切な部分ということから、なくてはならない大切なものをいう。
□	こちょうの夢	(こちょうのゆめ)	胡蝶之夢	自分とものの区別がなくなって、全てのものが一つのものとする万物一体の境地のこと。または、人の生がはかないことのたとえ。または、夢と現実の境がはっきりと区別できなくなること。 荘子が胡蝶になって遊ぶ夢をみて、目が覚めると夢で胡蝶になったのか、胡蝶が夢をみて自分になったのかわからなくなったという故事から。
□	こんじゃくの感	(こんじゃくのかん)	今昔之感	昔のことを思い出して、現在との時世や環境の大きな変化に深く感心すること。
□	ごその枝	(ごそのぎ)	梧鼠之技	様々な技能をもっているが極めている技能がないこと。または、役に立つ技能が一つとしてないこと。「梧鼠」はむささびのことで、飛ぶ、木に登る、泳ぐ、穴を掘る、走るという五つのスキルがあるが、どれも極めてはいないことから。
□	さいしんの憂	(さいしんのうれい)	採薪之憂	病気を患っていることを相手にへりくだっている言葉。病気で、薪（たきぎ）を採りにいくことすらできないという意味から。
□	さんこの礼	(さんこのれい)	三顧之礼	立場が上の人が礼を尽くして、すぐれた才能を持つ人を招くこと。または、立場が上の人が立場が下の人に礼を尽くして、仕事を依頼すること。「三顧」は三回訪問すること。古代中国の三国時代、蜀の皇帝劉備が諸葛亮を迎え入れるために住居を三回訪問したという故事から。
□	さんしの礼	(さんしのれい)	三枝之礼	両親に礼儀を尽くし、両親への孝行を重んじること。鳩の子どもは、親の鳩がとまっている木の枝の三本下の枝にとまるという意味から。
□	さんせいの養	(さんせいのよう)	三牲之養	親に食事をご馳走して孝行すること。「三牲」は牛、羊、豚の三種類のいけにえということから、ごちそうのたとえ。「養」は親を養うこと。
□	しそくの国	(しそくのくに)	四塞之国	攻めにくく守りやすい四方を山や川に囲まれた地勢の国のこと。
□	しちほの才	(しちほのさい)	七歩之才	「七歩」は七歩歩くという意味で、七歩歩間にすぐれた詩を素早く作る詩の才能のこと。三国時代、曹植の詩才に嫉妬した曹丕は七歩歩間に詩を作ることが出来なければ処刑すると命じたところ、即座にすぐれた詩を作ったという故事から。
□	しゅうみょうの門	(しゅうみょうのもん)	衆妙之門	全てのものが生まれ出るとされる門のこと。「衆」は数が多いこと。「妙」は様々な不思議な現象のこと。全てのもののことをいう。
□	しゅつらんの誉	(しゅつらんのほまれ)	出藍之誉	弟子が師匠を超えること。または、学問をすることで人は良い方向に向上すること。青い染料は藍の葉から作るが、布を染めることで藍よりも青くなるということから。「青は之を藍より取りて藍よりも青し」から出来た言葉。
□	しょうじんの勇	(しょうじんのゆう)	小人之勇	一時の感情に任せた、軽率な勇気のこと。「小人」は度量の狭い人、小人物。
□	しょうちゅうの珠	(しょうちゅうのたま)	掌中之珠	自分の中で一番大切なもののこと。または、自分の妻と子どものこと。手のひらの中にある宝石という意味から。
□	しょうはくの寿	(しょうはくのじゅ)	松柏之寿	長く生きること。または、長生きを祝う言葉。「松柏」は常緑樹の松とこてがしわのことで、どちらも寿命が長い植物ということから、長寿の象徴。
□	しょうばつの柄	(しょうばつのへい)	賞罰之柄	ほめることと罰を与えることができる権力のこと。「柄」は権力のこと。
□	しょうびの急	(しょうびのきゅう)	焦眉之急	危険が間近に迫ってきていることのたとえ。「焦眉」は眉が焦げるほどに火が近づくということ。「烧眉之急」とも書く。
□	しよきゅうの交	(しよきゅうのまじわり)	杵臼之交	身分をこだわらずに人付き合いをすること。「杵臼」はきねとすうのこと。中国の後漢の時代の公孫穆は、学費を稼ぐために呉祐の家で雇われて、きねとすうを使って米をついていた。あるとき呉祐が公孫穆に話しかけると、高い学識があることに驚き、その後は主従を越えた付き合いを結んだという故事から。
□	しよりの歎	(しよりのたん)	黍離之歎	国が減んだことへの嘆き。「黍離」は『詩経』「王風」の詩篇の名称。中国の東周の大夫が、西周の宮殿の跡地が荒地になっているのを見て嘆いて作った詩といわれている。「黍離之嘆」とも書く。
□	しらんの室	(しらんのしつ)	芝蘭之室	善人のたとえ。または、賢者に影響を受けることのたとえ。「芝」は靈芝のこと。「蘭」は蘭蓀のこと。どちらも植物で香り高いということから、善人や賢者のたとえ。「善人と居るは芝蘭の室に入るが如し」を略した言葉。
□	しらんの交	(しらんのまじわり)	芝蘭之交	良い影響を受ける賢者との交友。「芝」は靈芝のこと。「蘭」は蘭蓀のこと。どちらも植物で香り高いということから、善人や賢者のたとえ。
□	しんしょうの隔	(しんしょうのへだて)	参商之隔	距離が非常に離れているために、会う機会がないこと。または、夫婦や家族が別れたり、不仲になることのたとえ。「参」はオリオン座の星、参星。「商」はさそり座の星、商星。東西に遠く離れた二つの星は、空に同時に現れることはないということから。古代中国の高辛氏の二人の息子は仲が悪く、いつも争いをしていたために、互いに遠く離れた参星と商星をつかさどらせたという伝説から。
□	しんすいの労	(しんすいのろう)	薪水之劳	人に仕えて、怠けず懸命に働くこと。または、炊事などの家事仕事。「薪水」は薪を拾いに行って、水を汲みに行くこと。
□	じうの化	(じうのか)	時雨之化	「時雨」は適切な時に適度に降る雨のこと。適度な雨は草木の育成をよくすることから、君主の善政や聖人の教化が、人々を感化すること。
□	すいぎよの交	(すいぎよのまじわり)	水魚之交	とても仲がよく、離れたい交際や友情のこと。その関係を魚と水にたとえた言葉。三国時代、蜀の劉備が仲の良かった孔明を軍師に迎えたときに、古参の武将は不満をもらしたが、魚に水が必要のように私には孔明が必要だと言ったという故事から。
□	ずいこうの珠	(ずいこうのたま)	随侯之珠	貴重な宝玉やこの世で並ぶものがないほどの至宝のこと。中国の伝説上の銘珠のこと。「随侯」は人の名前で、随侯が傷ついた大蛇を助けたお礼に伝説の宝珠を貰ったとされる故事から。「隋侯之珠」とも書く。
□	せいうんの志	(せいうんのこころざし)	青雲之志	立身出世するために功名を得ようとする心。または、立派な人物になるために徳を磨こうとする志。「青雲」は雲の上にある青空のことで、高位や高官、学問や道徳を修めた立派な人物という意味。
□	せいていの蛙	(せいていのあ)	井底之蛙	広い世間を知らず、自分だけの狭い見識にとらわれていること。「井の中の蛙大海を知らず」と同じ意味。
□	せきしんの嘆	(せきしんのたん)	積薪之嘆	後から来た人が重用されて、先にいた人が下の立場になって苦労する悩みのこと。古い薪の上に新しい薪が積み重ねられていき、古い薪は下のままになっているという意味から。「積薪之歎」とも書く。
□	せきすんの功	(せきすんのこう)	尺寸之功	ほんの少しの功績。自身の功績を謙遜しているときに使うこともある言葉。「尺」と「寸」はどちらも短い長さの単位ということから、ほんの少しということのたとえ。
□	せきすんの地	(せきすんのち)	尺寸之地	ほんの少しの土地。「尺」と「寸」はどちらも短い長さの単位ということから、ほんの少しということのたとえ。

☐	せきすんの柄	(せきすんのへい)	尺寸之柄	ほんの少しの権力のこと。「尺」と「寸」はどちらも短い長さの単位ということから、ほんの少しということのたとえ。「柄」は権力のこと。
☐	せきそうの臣	(せきそうのしん)	刺草之臣	普通の人々のこと。「刺草」は草を刈り取ること。普通の人々が、君主に自身のことを謙っている言葉。草を刈り取るだけの卑しい者という意味から。
☐	せんけんの明	(せんけんのめい)	先見之明	これから先になくなるを見抜くことができる能力。「先見」は先のことを見抜くこと。「明」は物事の本質を見抜く能力のこと。
☐	せんじょうの国	(せんじょうのくに)	千乗之国	大国。「乗」は兵車を数える単位で、千の兵車を出すことのできる国ということから。一つの兵車には、それぞれに百人の兵がつくとされていて、十万の兵力をいう。
☐	せんじょうの歎	(せんじょうのたん)	川上之歎	時間が過ぎていくことへの嘆き。「川上」は川のそば。孔子が川の流れを見て、昼も夜も関係なく流れが過ぎていく、過ぎ去るとはこういうものかと嘆いたという故事から。「川上之嘆」とも書く。
☐	ぜひの心	(ぜひのこころ)	是非之心	物事の善と悪をしっかりと判別できる能力のこと。「是非」は正しいことと、間違っていること。
☐	そうかくの好	(そうかくのよしみ)	綏角之好	小さなところからの親交のこと。「綏角」は束ねた髪を角(つの)のように両側から垂らした小児の髪型のことから、小さい子供という意味。「好」は親しい関係のこと。
☐	そうかの狗	(そうかのいぬ)	喪家之狗	元気がなくてやつれている人のたとえ。または、身を寄せるところがなく、放浪している人のたとえ。「喪家」は喪中の家のこと。「狗」は犬のこと。葬式をしている家は忙しいので、犬に餌をやり忘れてしまい犬がやせてしまうという意味から。また、一説に家を失った犬や宿無しの犬のことをいうこともある。
☐	そうこうの妻	(そうこうのつま)	糟糠之妻	貧しい生活をして、共に苦勞をしてきた妻のこと。「糟糠」は酒かすと米ぬかのことから貧しい食事のたとえ。光武帝が、姉の湖陽公手と家臣の宋弘を結婚させようとしたが、既婚者である宋弘は「貧しい時期を共に苦勞してきた妻のことを大切にしたい」と言って断ったという故事から。
☐	そうしゅうの夢	(そうしゅうのゆめ)	莊周之夢	自分とものの区別がなくなって、全てのものが一つのものとする万物一体の境地のこと。または、人の生がはかないことのたとえ。または、夢と現実の境がはっきりと区別できなくなること。「莊周」は道教の始祖の一人とされる思想家の莊子の別名。莊子が胡蝶になって遊ぶ夢をみて、目が覚めると夢で胡蝶になったのか、胡蝶が夢をみて自分になったのかわからなくなったという故事から。
☐	そうほうの志	(そうほうのこころざし)	桑蓬之志	男子が将来の目標を心にしっかりと決めること。「桑」は桑の木で作った弓、「蓬」は植物のよもぎの矢のこと。古代中国で、男子が生まれるとこれから先に世間で活躍することを願い、矢を天地四方に射た風習から。
☐	そっとの浜	(そっとのひん)	率土之浜	国中。世界のあらゆる場所。「率土」は全ての土地という意味。「浜」は地がなくなる場所、地続きになっている陸の果て。
☐	たいざんの安	(たいざんのやすき)	泰山之安	その山のようにどっしりと安定していて変わらないこと。「泰山」は中国の山の名前。「太山之安」とも書く。
☐	たざんの石	(たざんのいし)	他山之石	自身を磨くために役に立つ、他人の間違っている行い。自分の所有していない、他人の山から採取された粗悪な石でも、自分の山から採取された宝石を磨くには役に立つというの意味から。他人の間違っている行いでも、自分を向上させるためには役に立つということのたとえ。
☐	たしょうの縁	(たしょうのえん)	多生之縁	この世に生まれる前から結ばれている深い因縁。道を歩いていて、知らない人と服の袖が触れるような些細なことでも、この世に生まれる前の、何度も転生を繰り返す間に結ばれた深い縁によるものだという意味から。本来は誤用だが、「他生之縁」と書くこともある。
☐	たんらんの患	(たんらんのうれい)	探卵之患	足場となる大切な場所を襲撃されることへの恐怖。または、内部の事情を見抜かれることへの恐怖。親鳥が巣を離れている間に、卵を取られてしまうのではないかという心配という意味から。
☐	だんがんの地	(だんがんのち)	彈丸之地	非常に狭い土地のこと。「彈丸」は小さな鳥を捕獲するために使う弾き弓の小さな玉のことで、非常に小さいもののたとえ。
☐	だんきの戒	(だんきのいましめ)	断機之戒	物事を途中でやめてしまったり、諦めてしまっはいけないという戒めの言葉。おもに学問のことを指す。「断機」は織りかけている機の糸を途中で切ること。孟子が学問を投げ出そうとしたときに、孟子の母親は織り途中の機の糸を切断して「学問を途中でやめることは、この織物と同じようなものだ」と言って戒めたという故事から。
☐	だんきんの交	(だんきんのまじわり)	断金之交	この上なく親密な友情のこと。「断金」は金属を断ち切ること。金属を断ち切ることができるほどに固く結ばれた絆という意味から。
☐	ちうの操	(ちうのそう)	徵羽之操	「徵羽」は中国の五音の中の二つのことで、二つの音を操ることから正しい音楽のこと。
☐	ちくばの友	(ちくばのとも)	竹馬之友	子供のころからの親友や幼馴染のこと。「竹馬」は一本の竹の棒を馬に見立てたもの。幼いころから竹馬で駆け回って一緒に遊んだ友達という意味から。
☐	ちすいの地	(ちすいのち)	置錐之地	ほんの少しの土地のこと。または、ひどく狭い空間のこと。錐(きり)を立てるのが精一杯なほど狭い土地という意味から。
☐	ちばの嘆	(ちばのたん)	遲暮之嘆	年老いていく自身の体を嘆くこと。「遲暮」は少しずつ終わりに近づいていくという意味から。
☐	ちゅうげんの鹿	(ちゅうげんのしか)	中原之鹿	多くの英雄が天子の位を狙って争うこと。または、一つの地位などの目的を狙って競い合うこと。「中原」は中国の黄河中流域のことで、当時の国の中心ということから天下のたとえ。「鹿」は鹿を追いかけることで、「鹿」は天子の位のたとえてもあり、獵師が鹿を追いかけることを天下を狙って競い合うことにたとえたもの。
☐	ちゅうわの氣	(ちゅうわのき)	冲和之氣	天地の間にある調和されて穏やかな気のこと。「冲和」はやすらかなこと。陰と陽が交わるところにあるものとされ、人間そのものを言い表す言葉。「冲和之氣」とも書く。
☐	ちようやの飲	(ちようやのいん)	長夜之飲	何日も続けて行う、大規模な酒宴。古代中国の殷の紂王は、朝になっても窓を開けずに灯りをともして、何日にも渡って酒宴を続けたという故事から。
☐	ちようやの楽	(ちようやのたのしみ)	長夜之楽	何日も続けて行う、大規模な酒宴。古代中国の殷の紂王は、朝になっても窓を開けずに灯りをともして、何日にも渡って酒宴を続けたという故事から。
☐	ちようようの序	(ちようようのじょ)	長幼之序	年上と年下の間にある、守るべき社会的、道徳的な秩序のこと。「長幼」は年齢が上の人と下の人。「序」は順序、席次のこと。儒教の五つの道徳法則、五倫のうちの一つ。
☐	ちौरんの危	(ちौरんのき)	重卵之危	この上なく危険なことのたとえ。積み重ねた卵は、いつ崩れて卵が割れるかわからないという意味から。
☐	ていえいの音	(ていえいのおん)	鄭衛之音	国を滅亡に導くほどの下品で淫靡な音楽のこと。「鄭」と「衛」は春秋時代の中国の国の名前で、両国の音楽はみだらなものであったとされている。

☐	てっぶの急	(てっぶのきゅう)	轍耐之急	危険や困難が迫っていることのたとえ。また、切迫した状況にある人のたとえ。「轍」は車輪の跡、わだちのこと。「耐」は魚の耐（ふな）のこと。水がなくなった車輪の跡にいる耐という意味から。 荘子が監河侯に米を借りに行ったが、監河侯から「近々年貢が入るのでその後に貸しましょう」と言われた。それを聞いた荘子は、「ここに来る途中で水が枯れた車輪の跡にいる耐に水をくださいと助けを求められました。そこで私は、後で川の水を持ってきてあげようと言えました。しかし耐は、水が欲しいのは今だと言って怒ってしまいました」というたとえ話をして窮状を訴えたという故事から。
☐	てんえんの差	(てんえんのさ)	天淵之差	違いの差が非常に大きいこと。天と淵には大きな開きがあるという意味から。
☐	てんじつの表	(てんじつのひょう)	天日之表	天子となるべき容貌のこと。「天日」は天子のこと。「表」は顔の形、容貌。中国の書生という人物が、唐の高祖李淵の次男を評した故事から。
☐	天のびろく	(てんのびろく)	天之美禄	酒の別名。「美禄」はよい俸禄ということ。天から授かった素晴らしいものという意味から。
☐	天のれきすう	(てんのれきすう)	天之曆数	運命のこと。または、天命によって帝王になる運命のこと。「曆数」は運命のこと。古代中国の伝説上の聖天子の堯帝が、自身の息子ではなく、臣下の舜に帝位を譲ったときに言ったとされる言葉から。
☐	てんぷの国	(てんぷのくに)	天府之国	外敵からの攻撃を防ぎやすい地形をしていて、作物がよくできる肥沃な土地のこと。「天府」は人の手が加えられていない、自然にできた倉庫という意味。
☐	てんもうの漏	(てんもうのろう)	天網之漏	天の下す罰から免れること。または、法の抜け穴をつくこと。「天網」は悪人を捕らえるために、天が張っている網ということから、国の法律をいう。
☐	とうけんの急	(とうけんのきゅう)	倒懸之急	状態が非常に切迫していること。「倒懸」は逆さまに吊るすという意味で、逆さ吊りになって苦しい状態にたとえたもの。
☐	とうじつの温	(とうじつのおん)	冬日之温	君主から臣下への恩恵は、寒い冬の日の陽光のように優しく暖かいということ。「冬日」は冬の日の太陽の光。「温」は暖かく心地よいこと。
☐	どうどうの陣	(どうどうのじん)	堂堂之陣	わずかな乱れもなく整然と隊列を組んでいる陣容のこと。「堂堂」はいかめしく立派な様子。
☐	どんぎゅうの気	(どんぎゅうのき)	吞牛之気	やる気に満ち溢れていること。牛を丸呑みするほどに大きな心意気という意味から。
☐	どんしゅうの魚	(どんしゅうのうお)	吞舟之魚	人並み外れた才能がある人、大人物のたとえ。舟を丸呑みにするほどの大きな魚ということから。
☐	どんぱの魚	(どんぱのうお)	吞波之魚	人並み外れた才能がある人、大人物のたとえ。
☐	なんざんの寿	(なんざんのじゅ)	南山之寿	事業が栄え続けること。または、長寿を祝う言葉。「南山」は中国にある終南山という山のことで、長寿や堅固の象徴とされていることから。
☐	なんちゅうの難	(なんちゅうのなん)	難中之難	難しいことの中でも、際立って難しいもの。
☐	にせいの好	(にせいのこう)	二姓之好	結婚すること。または、婚約した両家の親しい交際のこと。昔の中国では同じ姓をもつ者同士は結婚できないという風習があったことから、「二姓」とは姓の異なる両家のこと。
☐	ねんさいの明	(ねんさいのめい)	燃犀之明	物事の本質を鋭く見抜く力があることのたとえ。怪物がいるといわれる深い淵の中で、犀（さい）の角を燃やして探してみると、水の底に本当に怪物がいたという故事から。
☐	ねんびの急	(ねんびのきゅう)	燃眉之急	危険がすぐ近くまで迫って非常に緊迫した状況のたとえ。眉が燃えるほど近くに火が迫り、急を要する事態であることから。
☐	のうしゃの計	(のうしゃのけい)	囊沙之計	漢の將軍「韓信」が行った水攻めのこと。「囊沙」は土囊のことで、土囊を使って川の上流で水をせき止めて、敵が川を渡るのを見計らい土囊を外し、下流に一気に水を流して、多くの敵を倒したという策略。
☐	のうちゅうの錐	(のうちゅうのきり)	囊中之錐	すぐれた才能の持ち主は、大衆の中に交じっていても、自然と才能を発揮することから目立ってくることのたとえ。「囊中」は袋の中という意味。「錐」は小さな穴をあけるための鋭い刃先の工具 袋の中に錐を入れておくと、錐の刃先が「自ずと袋を突き破り、外に出てくることから。
☐	はいぐんの将	(はいぐんのしょう)	敗軍之将	戦いに負けた大将のこと。また、失敗したものは言い訳する資格はないということ。
☐	はいじつの怪	(はいじつのおやしみ)	吠日之怪	優れた言動を理解することができない見識の狭い者が、疑って非難すること。「吠日」は犬が太陽に向かって吠えるという意味。蜀の地方の高い山に囲まれ、曇りや雨が多く、太陽がほとんど出ない地方の犬は、たまに太陽が出ると驚いて太陽に向かって吠えるという故事から。
☐	はいすいの陣	(はいすいのじん)	背水之陣	死を覚悟して全力で物事にあたること。または、引くことができない困難な状況のこと。川や海を背にして退路のない陣形で戦うという意味。漢の韓信が、戦いの際に川を背にして退却できない状況を意図的に作り兵に決死の覚悟をさせて、二十万以上の趙の兵に大勝したという故事から。
☐	はおうの輔	(はおうのほ)	霸王之輔	一番力のある者の補佐役のこと。「霸王」は覇者と王者。「輔」は手助けするや、支えるという意味。周の文王が狩りの占いをすると、「霸王之輔」を得ると占われ、釣りをしている呂尚に出会ったという故事から。文王が「先君の太公が望みを求めておられた方である」と言ったことで、呂尚は太公望と呼ばれた。
☐	はくおくの士	(はくおくのし)	白屋之士	役人になることなく、貧しい生活をしている学者や知識人のこと。「白屋」は白い茅葺きの屋根の家ということから、普通の市民や貧しい家のことをいう。
☐	はくちゅうの間	(はくちゅうのかん)	伯仲之間	能力が拮抗していて、優劣をつけるのが難しいこと。「伯」は長男、「仲」は次男のことで、「伯仲」はよく似ていて、力がほぼ同じであることのたとえ。
☐	はちくの勢	(はちくのいきおい)	破竹之勢	止めることができないほどの激しい勢いがあること。植物の竹は、最初の一つ節を割くと、後の節は滞ることなく滑らかに割くことができるということから。
☐	はんいの戯	(はんいのたわむれ)	斑衣之戯	親孝行することのたとえ。または、孝養を尽くすことのたとえ。「斑衣」は子どもが着るような派手な模様の服のこと。楚の老萊子は七十歳になっても、子供用の服を着て子どものように戯れ、親を喜ばせて年老いたことを忘れさせようとした故事から。
☐	はんぼの差	(はんぼのしゅう)	反哺之差	親の恩に子が報いること、親孝行することのたとえ。「反哺」は食べ物を返すこと。中国の伝説で、鳥は六十日で成鳥になり、その後は親鳥に六十日の間、親に餌を与えるということから。
☐	はんめんの識	(はんめんのしき)	半面之識	少し顔を見たことがある程度の知り合いのこと。または、少し会っただけの人の顔を覚えていること。「半面」は顔の半分。顔の半分程度しか知らないの意。中国の後漢の応奉は、二十歳のときに戸から顔を半分出した車大工を見かけたただけなのに、数十年後に道で見かけた時に、その顔を覚えていたので声を掛けたという故事から。「半面識」と略して使うこともある言葉。

☐	ばくぎゃくの交	(ばくぎゃくのまじわり)	莫逆之交	互いに争うことがなく、気心の知れた関係。親友。「莫」は否定を意味する助字で、「莫逆」は逆らうことがないという意味。「莫逆」は「ばくげき」、「交」は「こう」とも読む。
☐	ばくしゅうの歌	(ばくしゅうのうた)	麦秀之歌	祖国が滅亡したことを嘆くこと。「麦秀」は植物の麦が伸びること。古代中国の殷の箕子が滅亡した殷の廃墟で、麦が生い茂っているのを見て嘆き作った歌ということから。
☐	ばっせいの斧	(ばっせいのおの)	伐性之斧	人の心や体に害を与えるもののこと。「伐性」は人としての本質を害すること。女性や淫らな音楽に溺れたり、偶然起こる良い出来事に期待することをいう。人としての本質を破壊する斧という意味から。
☐	ばっびょうの家	(ばっびょうのいえ)	伐冰之家	地位の高い身分の家柄。「伐冰」は氷を切り出すこと。古代中国では、卿大夫以上の高い身分の家柄のものだけが、葬式に氷を使うことが許されたということから。「伐冰之家」とも書く。
☐	ばんじゃくの固	(ばんじゃくのかため)	磐石之固	並外れて堅固なこと。安定していて、揺れ動くことがないこと。「磐石」は大きな岩のことで、並外れて固いことや、安定していることのたとえ。「磐石之固」とも書く。
☐	ばんじょうの君	(ばんじょうのきみ)	万乗之君	大国の君主のこと。「乗」は兵車を数える単位のこと。一つの兵車につき百人の兵がつくとされ、一万台の兵車を出すことができる国の君主という意味から。
☐	ばんぜんの策	(ばんぜんのさく)	万全之策	失敗する可能性が少しもない、完璧な策略。「万全」は一万に一つも失敗する可能性がないということから。
☐	ばんぶの望	(ばんぶののぞみ)	万夫之望	世界の多くの人々に尊敬して慕われること。または、そのような人のこと。「万夫」は数多くの人、万人。「望」は仰ぎ見る、尊敬すること。
☐	ばんりの望	(ばんりののぞみ)	万里之望	高い官職や地位につきたいという望みのこと。「万里」は非常に遠い距離のたとえ。非常に遠くにある目的地に着きたいという意味から。
☐	ひせきの心	(ひせきのこころ)	匪石之心	自分の信念を堅く守り、決して揺らぐことのない心のこと。石のように転がることがない心という意味から。
☐	ひっぶの勇	(ひっぶのゆう)	匹夫之勇	思慮の足りない人が一時の感情に任せただけの勇氣のこと。「匹夫」は身分の低い人や普通の人という意味から、軽率な人のたとえ。
☐	ひふの見	(ひふのけん)	皮膚之見	物事の表面的な部分だけを見て、本質を捉えようとしない浅はかな考えのこと。「見」は考えという意味。
☐	ひやくせいの師	(ひやくせいのし)	百世之師	後世までずっと師として尊敬され続ける人のこと。「百世」は世代が百代もの長い期間という意味から、非常に長い年月、後世まで長く続くという意味。
☐	ひやくせいの利	(ひやくせいのり)	百世之利	永遠に利益を得続けること。「百世」は世代が百代もの長い期間という意味から、非常に長い年月、後世まで長く続くという意味。
☐	ひやくねんの業	(ひやくねんのぎょう)	百年之業	これから後の世に残る素晴らしい仕事のこと。または、昔から受け継がれてきた伝統的な仕事のこと。「業」は仕事という意味。
☐	ひやくねんの柄	(ひやくねんのへい)	百年之柄	将来のことを考えた政治を行い、権力を長く保とうとすること。「百年」は長い期間のたとえ。「柄」は権力のこと。
☐	ひやくやくの長	(ひやくやくのちょう)	百薬之長	酒のこと。酒を賞賛したもので、様々な薬の中で酒が最も効果があるという意味の言葉。「百薬」は様々な種類の薬。「長」は最も上に立つもの、かしら。前漢の王莽が言ったとされる言葉から。
☐	ひやくりの命	(ひやくりのめい)	百里之命	一つの国の政治、運命のこと。「百里」は四方が百里の範囲のことで、天子から委任された諸侯の国の領土のことをいう。「命」は制令のことで、一国の運命のこと。
☐	びせいの信	(びせいのしん)	尾生之信	約束を守りぬくことのたとえ。または、正直すぎて機械のきかないことのたとえ。「尾生」は人の名前。「信」は信義という意味。魯の国の尾生が橋の下で女性と会う約束をしたが、いつまでも女性はこないまま尾生は橋の下で待ち続けた。やがて、雨が降り始めて川が増水して、橋の橋脚に抱きついたまま溺れ死んだという故事から。
☐	びゅうゆうの説	(びゅうゆうのせつ)	謬悠之説	何の根拠もない、でたらめな話。「謬」は間違っていること。「悠」は極めて広いこと。
☐	びょうどうの器	(びょうどうのき)	廟堂之器	朝廷で政治を行うことができる、すぐれた才能のある人物のこと。「廟」は君主の祖先をまつた建物、宗廟。「堂」は君主と臣下が会議を行う場所、明堂。「廟堂」は宗廟と明堂ということから、政治を行う朝廷のこと。「器」は才能のこと。
☐	ふいの極	(ふいのきょく)	布衣之極	庶民として最高の出世のこと。「布衣」は布で作った衣服のことで、一般庶民をあらわすことから、無位無官の人のこと。「極」は最高、最上という意味。
☐	ふいの交	(ふいのまじわり)	布衣之交	身分や地位などを気にしない心からの交友。または、庶民の付き合い。「布衣」は布で作った衣服のことで一般庶民をあらわすことから無位無官の人のこと。
☐	ふうぎよの災	(ふうぎよのわざわい)	風魚之災	海上で受ける嵐などの災難のこと。または、外敵や海賊などによる災いのこと。「風」は嵐、「魚」は鯨魚などの災いをもたらす悪魚のこと。
☐	ふうじゅの歎	(ふうじゅのたん)	風樹之歎	父母が亡くなり孝行しようとしてもできない嘆きのこと。「風樹」は風に揺れる木のこと。風で揺れている木は、木自身が制止したいと思っても風が止まなければ制止できず、思い通りにいかないということから。「風樹之嘆」とも書く。
☐	ふうそうの任	(ふうそうのにん)	風霜之任	罪や責任を問いただすことは、厳しく激しい任務ということから、監察官や司法官のこと。「風霜」は勢いの激しい風と寒々しい霜の厳しさのこと。「任」は任務という意味。
☐	ふうぼくの悲	(ふうぼくのかなしみ)	風木之悲	父母が亡くなり孝行しようとしてもできない悲しみのこと。「風木」は風に揺れる木のことで、風で揺れている木は、木自身が制止したいと思っても風が止まなければ制止できず、思い通りにいかないということから。
☐	ふうんの志	(ふうんのこころざし)	浮雲之志	愚行で手に入れた地位や財産は、儚いものであるという考え。または、そのようなものは自身とは関係ないものだという考え。「浮雲」は空に浮いている雲のことで、雲はすぐに散ってなくなることから、儚いもののたとえ。または、雲は手の届かないところにあるということから、自身に関係がないもののたとえ。
☐	ふかの征	(ふかのせい)	夫家之征	定職についていない者に課せられた、中国の周の時代にあった罰金。「夫家」は夫婦、「征」は税を徴収すること。一組の農民の夫婦に田が与えられ、その夫婦に課せられていた税と同じ額の罰金を課せられていたということから。
☐	ふかんの書	(ふかんのしょ)	不刊之書	いつまでも伝わり続ける書物。不朽の名作。「刊」は削るという意味。紙のない時代には、木や竹に文字を記し、必要の無い部分や誤った部分は削っていたということから。
☐	ふくしゃの戒	(ふくしゃのいましめ)	覆車之戒	先人の失敗を学び、今の戒めにする。こと。「覆車」はひっくり返った車の残した車輪の跡のこと。先に通った車のひっくり返った車輪の跡を見て、同じようにならないように、その場所を通らないようにするという意味から。

☐	ふくひの法	(ふくひのほう)	腹誹之法	心の中で非難するだけで罰する法律のこと。「腹誹」は心の中で対象を非難すること。「腹非之法」とも書く。
☐	ふぐの誉	(ふぐのほまれ)	不虞之誉	偶然手に入れた名誉のこと。「不虞」は予想外、思ってもいないこと。手に入れた名誉を謙遜していう言葉。
☐	ふけいの舟	(ふけいのふね)	不繫之舟	心に不満や不信など何もない、無心のたとえ。または、なにものにも縛られずにただ漂っているだけのような人のこと。繫がれてなく、ただ波に漂う船という意味から。
☐	ふげんの教	(ふげんのおしえ)	不言之教	口に出すことなく相手に習得させることのできる教えのこと。老荘思想の「無為自然」の教えのことで、道を修めた者は、何もせず、何も言わずに人を教え導くことができるということ。
☐	ふしんの憂	(ふしんのうれい)	負薪之憂	自分の病気を謙遜していう言葉。「負薪」は薪を背負うこと。「憂」は病気。薪を背負ったせいで疲れてしまっ て病気になるということから。または、病気になってしまい、薪を背負う余力も無くなるということから。
☐	ふしんの病	(ふしんのへい)	負薪之病	自分の病気を謙遜していう言葉。「負薪」は薪を背負うこと。薪を背負ったせいで疲れてしまっ て病気になるということから。または、病気になってしまい、薪を背負う余力も無くなるということから。
☐	ふじの言	(ふじのげん)	附耳之言	隠し事は漏れやすく、あっという間に広まるということ。「附耳」は口を耳に近づけて話をするという意味。耳の横で小さな声で話をして も、千里も離れている場所でも聞こえてしまうということから。「付耳之言」とも書く。
☐	ふてんの下	(ふてんのもと)	敷天之下	世界中。「敷天」は空の隅々までということ。空を隅々まで覆うという意味から。「敷天」は「普天」とも、「薄天」とも書く。
☐	ふばつの志	(ふばつのこころざし)	不拔之志	何があっても諦めないこと。「不拔」はどうやっても抜くことができないという意味から、とても堅いことのたとえ。
☐	ふもうの地	(ふもうのち)	不毛之地	作物が育たない、ひどく痩せた土地。または、見るべきよい結果や、発見が何もないこと。「毛」は地面から生える草木や穀物のこと。
☐	ふりの布	(ふりのふ)	夫里之布	夫布と里布という、古代中国の税のこと。「夫布」は無職の人に課される税のこと。「里布」は麻や桑を家の敷地内に植えない人に課される税のこと。「布」は布銭、金銭のこと。
☐	ふんぼの地	(ふんぼのち)	墳墓之地	生まれ育った故郷。または、死ぬまで暮らそうと思っている地のこと。「墳墓」は墓のこと。祖先から受け継いだ墓がある地という意味から。
☐	ふばの災	(ふばのわざわい)	舞馬之災	火事のこと。中国の晋の時代の黄平は、馬が踊り、それを見た人々が拍手する夢を見た。そのことを占いの名人の索タンに相談すると、「馬は火の象徴であり、それが踊るということは火が巻き起こること。馬に拍手するというのは、火を消そうとすることだ」といわれ、黄平が帰ると家が火事にあっていたという故事から。
☐	ぶんぼうの労	(ぶんぼうのろう)	蚊虻之劳	価値のない、つまらない技術のこと。「蚊虻」は虫のかたとあぶ。蚊や虻のような小さな労力という意味から。
☐	ぶんゆうの寄	(ぶんゆうのき)	分憂之寄	諸国の政務を行った地方官、国司のこと。「分憂」は憂いを分かち合うこと。「寄」は任務のこと。人々と憂いを分かち合う任務という意味から。
☐	へいしゃの会	(へいしゃのかい)	兵車之会	武力を用いて開かれる諸侯の会合のこと。「兵車」は戦闘に使用する車(戦車)。
☐	べいせんの精	(べいせんのせい)	米泉之精	酒のこと。米を発酵・熟成させる手法が酒の主な造り方であることから。
☐	ほうせいの士	(ほうせいのし)	方正之士	きちんとした正しい行いをする人のこと。
☐	ほうちゅうの信	(ほうちゅうのしん)	抱柱之信	約束を守りぬくことのたとえ。または、正直すぎて機転がきかないことのたとえ。「抱柱」は橋の脚にしがみつくこと。「信」は信義という意味。魯の国の尾生が橋の下で女性と会う約束をしたが、いつまでも女性はこないまま尾生は橋の下で待ち続けた。やがて、雨が降り始めて川が増水して、橋の橋脚に抱きついたまま溺れ死んだという故事から。
☐	ほりゅうの質	(ほりゅうのしつ)	蒲柳之質	生まれた時から体が弱く、病気になりやすいこと。「蒲柳」は植物のかわやなぎ、ねこやなぎのことで、木が柔らかく、秋になると真っ先に葉が落ちることから、病弱な体質のたとえ。
☐	ぼうようの嘆	(ぼうようのたん)	亡羊之嘆	進路や方針が多すぎて何を選ぶべきかわからなくなること。または、学問の道が細かく分かれすぎていて、学問の根本を捉えにくいことのたとえ。「亡羊」は羊に逃げ切られること。羊が逃げ出し、大勢の人で追いかけたが分かれ道が多く、逃げられてしまったという話を聞いた楊朱は、学問も同じように様々なものに分かれすぎていて、それぞれ根本の部分は同じなのにそれを忘れ、理解できなくなっていると言ったという故事から。
☐	まちゅうの蓬	(まちゅうのよもぎ)	麻中之蓬	悪いものもよい環境の中では、よいほうに正されるということ。普通は曲がりくねって育つことの多い蓬も、まっすぐ育つ麻の中で育てるとまっすぐに育つという意味。
☐	むけいの談	(むけいのだん)	無稽之談	でたらめで根拠のない話のこと。「無稽」は考えるべき根拠がまるでないこと。
☐	むこくの民	(むこくのみ)	無告之民	貧しい人や老人、孤児などの弱者のこと。苦しみを訴える相手や手段が存在しない人たちのことから。「無告」は苦しみを訴える相手が誰もいないこと。
☐	むぼうの福	(むぼうのふく)	無妄之福	考えてもいなかった幸運が突然訪れること。「無妄」は予期していなかったことが突然起こること。「無」は「无」、「毋」とも書く。
☐	むようの用	(むようのよう)	無用之用	一目見た時は役に立たないと思っていたものが、重要な働きをすること。『老子』や『莊子』でよく使われる逆接的な理論。車軸や容器の内側には何も ないことが重要であり、役に立つ働きをするということから。
☐	めいげつの珠	(めいげつのたま)	明月之珠	暗闇でも自ら光を放って照らす明月のような宝玉のこと。
☐	めいせいの才	(めいせいのさい)	命世之才	世に有名な才能のこと。または、そのような才能を持っている人のこと。「命世」は世に名前が知れ渡っているという意味。
☐	めいめいの志	(めいめいのこころざし)	冥冥之志	人に知られないように努力すること。または、人に知られないように心の底で決意すること。「冥冥」は暗い様子という意味から、人に知られない様子のこと。
☐	もうぞうの縄	(もうぞうのなわ)	妄想之縄	自分の身を苦しめる心の迷いのこと。仏教語で、みだらな考えや心の迷いを身体を縛るための縄にたとえたもの。
☐	もろはの剣	(もろはのつるぎ)	両刃之剣	役に立つものでも、使い方を間違えると危険をもたらすことのたとえ。または、大きな利益を得る可能性もあるが、大きな被害を受ける可能性もあること。「両刃」は背と腹の両方に刃がついている剣のことで、使い方を間違えると使用者自身にも危険が及ぶことから。「諸刃之剣」とも書く。

☐ ゆうざの器	(ゆうざのき)	宥坐之器	自らの戒めとするために身近に置いてある道具のこと。「宥坐」は身近や身の回りという意味。桓公の墓にあった器は「水が入っていない空の時は傾き、水を適度に入れるとまっすぐに立ち、水が満ちるとひっくり返り全てこぼれる」という。これを見た孔子は「知を持つものは愚を自覚し、功績を持つものは謙譲の心を持ち、力を持つものは恐れを忘れず、富があるものは謙遜を忘れずに正しい姿勢を保て。」と説いた故事から。
☐ ゆうしゅうの美	(ゆうしゅうのび)	有終之美	物事をやり遂げ、最後に立派な結果を残して終わること。
☐ ようけんの才	(ようけんのさい)	鷹犬之才	獵で使われる鷹(たか)や犬は主の意思に従って働くことから、手先として使うことで役に立つ才能やその才能の持ち主のこと。「才」は才能、または才能の持ち主。
☐ りくせきの狐	(りくせきのこ)	六尺之狐	未成年の狐児のこと。または、まだ幼い時に父王と死別して即位した君主のこと。「六尺」は一・四メートルで十四、五歳の身長のこと。また、一尺を二歳半と考えて、十五歳とする説もある。「狐」は狐児のこと。
☐ りそうの戒	(りそうのいましめ)	履霜之戒	大きな災難に遭わないように、少しでも災いの予兆があれば準備する、もしくは避けるべきという戒め。「履霜」は霜を踏むこと。霜を踏むようになると寒さが今まで以上に厳しくなるので準備をするべきであるという意味。
☐ りっすいの地	(りっすいのち)	立錐之地	とても狭い土地や空間のこと。錐(きり)を立てるのが精一杯なほど狭い土地という意味。一般的には「立錐の余地もない」と用いる。
☐ りょううんの志	(りょううんのこころざし)	凌雲之志	世俗を超越しようとする気高い志。または、高い地位に出世することを願う大きな志。「凌雲」は雲よりも高い所という意味から、世間を超越するという意味。「陵雲之志」とも書く。
☐ ろうばの智	(ろうばのち)	老馬之智	長い経験によって培われたすぐれた知識や経験のこと。齊の管仲が戦いの帰りに道に迷い、一度通った道は覚えていたという老馬の知恵を頼って放り、その後をついていくと無事に帰ることができたという故事から。
☐ ろぎよの謬	(ろぎよのあやまり)	魯魚之謬	「魯」と「魚」の字の形が似ていることから、文字を書き誤ること。